

Hondaの交通安全情報紙



Since 1971



Safety for Everyone

Hondaはすべての人の交通安全を願い活動しています。

●編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内 〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1 TEL 03(5412)1736 http://www.honda.co.jp/safetyinfo/

●編集人：吉田宏樹

※年間購読をご希望の方は、下記までお問い合わせください。(株)アストクリエイティブ 安全運転普及本部係 TEL 03(5439)1191 E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp



SJホームページは

CONTENTS

特集：子どもへの交通安全教育

自ら判断して危険を回避できる力を身につけてもらうために……①

- TOPICS①／ガンレク！フェスタ……④
TOPICS②／第14回全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会……④
現場訪問／親子バイクスペシャル ファミリー耐久コンペティション……⑤
NEWS REVIEW①／警察庁……⑤
NEWS REVIEW②／平成25年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式……⑤
STREAM／全国に広がるHondaの高校生交通安全教育活動 第6回……⑥
危険予測トレーニング(KYT)/バス停の近くで(子ども編)……⑦
指導者ファイル／静岡県交通安全協会富士地区支部交通安全指導員の皆さん……⑦
SJクイズ……⑦
SAFETY FOCUS／兵庫県尼崎市……⑧

特集：子どもへの交通安全教育

自ら判断して危険を回避できる力を身につけてもらうために

平成25年の歩行中の交通事故死者数を年齢層別にみると、子ども(15歳以下)が占める割合は2.1%であるが、子どもの死者数は前年に比べ微増した。近年、全国で通学路の緊急点検が実施され、必要な安全施設の整備など対策が進んでいるが、その一方、各年代で適切な交通安全教育も必要である。次世代を担う子どもたちの命を守るための、交通安全教育はどうあるべきかを探る。

「あやとりい」を活用した幼児への交通安全教室

子どもへの交通安全教育においては、幼児期から発達段階に合わせた適切な指導が必要だ。Hondaは、この考え方のもと子どもの成長に応じた教育プログラムや教材を開発している。交通安全教育プログラム「あやとりい」もその一つだ。Hondaでは「あやとりい」の教材とともに、指導ノウハウを地域の指導者に提供し、こうした方々によって全国の幼稚園・保育園や小学校の交通安全教室で活用されている。

山形県小国町では、幼児への交通安全教育は「かもしかクラブ」を中心として行っている。この「かもしかクラブ」は町内の全保育園(5園)に設けられ、年間11回にわたって交通安全教室を実施。小国町役場町民税務課町民生活室交通安全専門指導員である佐藤郁さんと保護者の代表者が幼児への指導にあたっている。



「あやとりい ひよこ編」を使って指導する小国町役場交通安全専門指導員の佐藤郁さん



山形県小国町にある白百合保育園での「かもしかクラブ」

佐藤さんは山形県内の指導員の研修会で、Hondaのインストラクターから幼児から小学校低学年対象の「あやとりい ひよこ編」の指導ノウハウを学び、平成25年度より「かもしかクラブ」での指導に取り入れた。「幼児に対しては、いかにわかりやすく伝えるかが大切だ」と。その点で「あやとりい ひよこ編」はたいへん役に立っています。交通場面を示すワークシートが街中だけでなく、小国町のような自然が豊かな場所まで用意されているので、子どもたちに親近感を持ってもらえます。また、ワークシートに人やクルマのイラストを貼ってもらったりなど、単に話を聞くだけでなく子どもが参加できるように工夫されている点も効果的です」と佐藤さんは話す。



道路を渡る時は横断歩道を利用するように指導

続いて「今日は道路の渡り方を勉強します」と佐藤さん。子どもたちの目の前には「あやとりい ひよこ編」の大型のワークシートがあり、そこには郊外にある交差点が描かれている。佐藤さんが「どこを歩けばいいか、みんなに教えてくれるかな？」と親子が手をつないでいるイラストを男の子の一人に渡すと、男の子はワークシートの道路の右側端に親子のイラストを貼り付ける。「正解です。ちゃんと白い線(路側帯)の内側に貼ってくださいました」と佐藤さんがいうと、他の子どもたちも拍手が起きた。次に、佐藤さんは同じワークシートに横断歩道のイラストを貼り付け、「道路を渡る時は必ずこの横断歩道のあるところを歩いてください」と説明。「ただし、何もせず、そのまま渡ってしまうとクル



ワークシートにイラストを貼ることで、歩行者は道路のどこを歩けばよいか示してもらう

※1 あやとりい=Hondaが三重県鈴鹿市と協力して開発した交通安全教育プログラム。幼児～小学校低学年対象の「あやとりい ひよこ編」、小学3～4年生対象の「あやとりい」、幼児～小学校高学年対象の「あやとりい 自転車教室」、高齢の歩行者・自転車利用者対象の「あやとりい 長寿編」がある。あやとりいは「あんぜんを やさしく とぎあかし りかいして いただく」の略。詳細は以下ホームページを参照。http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/



年長クラスでは模擬の横断歩道を渡ろうとする前に様々なキャラクターが描かれたイラストを示し、幼児に何が描かれているかを答えてから渡ってもらう

保護者の伊藤さんは「命は1人に1つしかないということを意識づけたいことをめざしています」、河内さんは「普段、子どもが友だちの家に歩いて行く時は、横断歩道と一緒にストップの約束を実践

確認の動作が形だけで終わらないように

マとぶつかってしまいます。そこで大切なのが「ストップの約束」です。これは道路を横断する際に「ストップ(止まる) ↓手を上げて横断の意思を示す ↓手を下ろして右、左、右を確認 ↓横断を開始」という山形県内で幼児に啓発しているルールのこと。右、左、右を確認する時は、腰から上半身を曲げて遠くのほうまでよく観るように佐藤さんは強調する。そして、教室内に横断歩道を示すマットが敷かれ、子どもたちは身体を動かしながら、「ストップの約束」の動作を確認した。

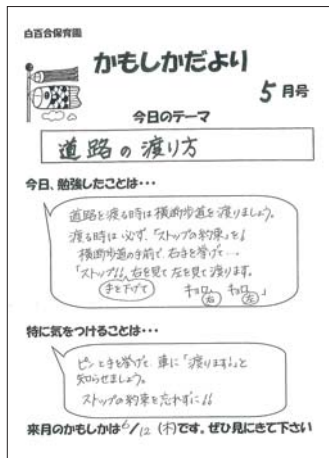
年長クラスでは、佐藤さんと保護者が横断歩道を渡ろうとする子どもを両側に立ち、様々なキャラクターが描かれたイラストを子どもたちに示す。右、左、右を確認した子ども一人ひとりに、佐藤さんが「何

が描いてありましたか？」と質問。答えられなかった子どもには「もう一度よく観てね」と繰り返し尋ねた。「自分の命を守る上で、安全確認はとても重要です。首を振るといふ動作をすればいいと思っっている子どもも少なくありません。視線を送った先に何かがあるのか把握できて、確認になり



小国町の「かもしかだより」では保護者が前回の復習(写真上)と今回のまとめ(写真下)を担当

保護者へ配付する「かもしかだより」



して「います」と、子どもの安全意識を向上させるために取り組んでいる。「かもしかクラブ」では、その日に幼児が学んだ内容を保護者が「かもしかだより」としてまとめ、それを保育園から他の保護者にも配付している。指導内容を、家庭でも継続できるようにするための工夫である。次回は6月に、雨の日の交通安全、クルマの乗り方と降り方を指導する予定だ。

小学4年生への危険予測トレーニング

東京都板橋区立高島第五小学校は平成23年度より3年間に渡り、「交通安全」「生活安全」「災害安全」を包括した安全教育の研究に取り組んだ。そのテーマは「自他の生命を尊重し、安全のための行動ができる児童の育成」「危険を予測し、自ら回避できる能力を育成するために」。

平成25年度は交通安全の授業の1つとして、小学4年生2クラスの担任(当時)だった入戸野小絵美主任教諭と成瀬喜芳教諭が総合的な学習の時間で「高島平交通安全マップを作ろう」という授業を5回にわた



高島第五小学校では「高島平交通安全マップを作ろう」という授業の導入として、4年生の児童に危険予測トレーニングを行った

って行った。同校では毎年7月に学年ごとに交通安全教室を開催している。3年生のみ実技による自転車運転講習会を実施し、受講した児童には板橋区が発行する自転車免許証が交付される。「自転車を利用して、行動範囲が広がる始めるのが4年生の頃です。ほとんどの子どもたちは『自分は交通事故に遭わない』『自分だけは大丈夫』と交通ルールを他人事のように考えています。そこで、普段利用している道路は安全に見えるかもしれないけれど、危険な場所も存在することを子ども自身に気づいてもらおうと考えたわけです。さらに危険予測の考え方を理解することで、自分の身を守ってほしいと思います」と、二人はこの授業を計画した背景を話す。

今年2月に行われた1回目の授業は、自転車に乗っている時の映像を見て、起こりうる危険や、問題点について児童に考えてもらうという内容。自転車の事故が起こりやすい危険場面を知って、地域の交通安全マップをつくる必要性を感じてもらおうことが目的だ。教材として使うのは、ホンダの「危険予測トレーニング(KYT)DVD」(下記参照)。今回は自転車に乗る小学生が住宅街を走行しているシーンが取り上げられた。このシーンでは、信号機のない交差点を左に曲がろうとしている場面が映像が止まる(左下参照)。交差点の先にあるカーブミラーには右側から近づくクルマが映っていること、見通しの悪い場所では一時停止して左右の安全を確認する必要があることに気づいてもらうのがねらいである。



問題として使われたHondaの危険予測トレーニング(KYT)DVDに収められている交通場面の1つ。子どもの乗った自転車が下り坂の先の交差点で左折しようとしている

「危険な場面の写真やイラストは私たちでも用意できますが、その場面の後に起こることを提示することは容易ではありません。このDVDは、問題となる場面にいたる過程から、クルマなどと衝突しそうなことになるまでの一連の流れを映像で見せることができます。さらに、クルマの急ブレーキの音でも危険であることが伝わり、子どもを

●危険予測トレーニングDVD

四輪車、二輪車、自転車、歩行者の 카테고리ごとに動画で再現された交通場面のケーススタディ計25場面が収められており、免許を持たない学生や高齢者の方でも事故防止のポイントが学べる内容になっている。

価格：3600円+税
企画・制作：本田技研工業(株)安全運転普及本部(株)JAF MATE社

※詳しくは以下のホームページを参照

ホンダ 危険予測トレーニング

検索

http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/training/



特集：子どもへの交通安全教育



高島第五小学校の菅徹校長（写真左）、入戸野小絵美主任教諭（写真中央）、成瀬喜芳教諭（写真右）

街の中の危険箇所を 児童自ら見つけ出す

ヒヤッとさせることができるため、危険予測の必要性を子どもたちに理解してもらおうと、たいへん有効な教材です」と入戸野主任教諭は評価する。この授業を受けた児童からは「交差点にあるカーブミラーがどの場所を映しているのかが、よくわかりました」「これまでカーブミラーのことを意識していませんでしたが、見通しの悪い場所ではこれを観れば危険に早く気づけることが勉強になりました」という声が聞かれた。

2～5回目の授業で、本題である交通安全マップを制作。4つの班ごとに担当地域を振り分け、街の中の危険な場所を探す。児童自ら写真を撮影し、必要があれば歩行者や自転車利用者へのヒアリングも行った。中にはパトロール中の警察官に交通事故の傾向を聞いた児童もいたそうだ。「1回目の授業で、どんな場所が危険なのかを学びました。次は、普段利用する道路でそれに当てはまる場所を自分の力で見つけ出すということがテーマになります」と入戸野主任教諭はいう。児童は自分たちが見つけた危険箇所の写真やコメントを白地図に書き込み、交通安全マップを完成させ、最後の授業で班ごとに発表し合った。そして、見通しの悪い場所は危険である、人がたくさん歩いている歩道は歩行者とぶつかりやすい、下り坂はスピードが出やすいなど、



児童は街を歩きながら危険な場所を探し、班ごとに担当した地域の交通安全マップ発表。児童同士で危険な場所とその理由について意見を交換した

危険ポイントについてクラス全員で共有。入戸野主任教諭と成瀬教諭は、そうした場所を安全に通行するためにはどうすべきかを一人ひとりに考えてもらい、5回にわたる授業は終了となった。児童は「信号機もなく、見通しの悪い場所は意外に多いことがわかりました。そのような場所を通る時は、きちんと周囲の安全を確かめてから渡るようにしています」「人の多い場所では自転車を降りて押し歩きたいことになりました」と、授業で気づいたことを交通安全に役立てている。高島第五小学校の菅徹校長は「子どもたちは交通安全の知識を幼児の頃から持っています。小学生の段階では、学習の中でその知識を行動に結び付けることが課題です。例えば、危険予測の授業ではカーブミラーの存在や使い方を意識づけることができたので、見通しの悪い場所で安全確認を慎重に行うことが習慣になって身についていくのではないのでしょうか。私たちは交通安全だけでなく、生活安全、災害安全のための教育にも力を入れています。例えば、マ



見通しの悪い交差点や自転車の通行量の多い通りなど、児童は街の中で危険が潜んでいると思われる場所を見つけた



やってきて日常というかけがえのない時間を奪っていく危機である。子どもへの安全教育を研究している日本こどもの安全総合研究所（特定非営利活動法人）理事長の宮田美恵子さんは、こう

必要だと指摘する。

ンションや団地で暮らしている子どもが多いので、エレベーターの安全な乗り降りや不審者が乗り込んできた場合の対応も指導しています。いずれも、基本となるのは自分の安全を自分で確保するという考え方を身につけることです」と話す。

0歳から始まる 子どもへの安全教育

平成21年に「学校保健法」を改正した「学校保健安全法」が施行されたことを受け、教育現場では学校安全（交通安全・生活安全・災害安全）に取り組んでいる。交通事故、犯罪、自然災害は、いずれも突然



日本こどもの安全教育総合研究所理事長・宮田美恵子さん。日本女子大学人間社会学部客員准教授を経て同研究所を設立。現在は順天堂大学医学部協力研究員として、大学で学生への講義のほか、児童・生徒の授業、および成人を対象とした市民安全のための生涯学習活動にも力を入れている

「子どもが巻き込まれる交通事故や凶悪犯罪が相次ぐ中、『子どもの安全を守る』という言葉がよく聞かれるようになりました。子どもを守るには、大人が守ってあげるといふ受身のものだけでなく、子ども自身が自ら判断して行動を起こせるよう生涯役立つ力としての『安全力』を育むこともあります。こうした安全教育においては『自分の安全を守る』『他者の安全も守れる』の2つが目標となります。子どもが自分の命を守る行動をとれるようになるためには、『自分を守るべき大切な命を持っているから』『大切な人を悲しませないためにも』という動機づけが必要です。これは0歳の時から始める必要があります。スキンシップなどを通じて、一番身近な保護者が子どもに自分は大変な命を持っている存在であることを感じさせ、自尊心を育むのです。これが安全教育の土台となります。そして、幼稚園や保育園での交通安全教室も重要な役割を果たしています。頭が柔軟な時期の子どもに約束を守ること、

他者との距離のとり方を 身につける

一方、他者の安全を守るような行動をとってもらうために重要なこととして、宮田さんは距離感の醸成をあげる。「多くの子どもたちが自転車を利用していますから、子どもといえども加害者になる可能性はあるわけです。そうしたリスクを回避するために、身につけてほしいのが、腕を物差しにした3つの距離なのです」。

1つ目は、腕と腕が触れ合える距離。親子や夫婦など、最も親しい人だけが入れる。2つ目は、手をつなげるくらいの距離で、友だちなど知っている人との距離感だ。最後が、お互いに手を伸ばした距離。これは見ず知らずの人と保つべき距離約1・2mを意味する（パーソナルスペースの概念）（HIE）。この距離感が最近の子どもたちには曖昧になってきているのではないかと、宮田さんは危惧する。「こうした距離のとり方を身につけておけば、自転車で歩道を走っていて、知らない歩行者の人を追い抜いたり、すれ違ったりする時に安全な間隔を保ち、歩行者に恐怖感を与えないように配慮できるはず。自分と他者の境界を意識させることは交通事故防止にもつながるでしょう。交通安全教室では、自転車に乗った自分と歩行者との距離感をコントロールできるようにするための訓練も取り入れてほしいと思います」。

他者のことを大切に思えばこそ、その人に不快感を与えない距離が必要で、そうした心と心を配る「思いやり」を持つことは、将来の良き交通社会人となることにつながっていくと宮田さんは考えている。

警察庁の資料によれば、過去5年間の小学1・2年生の歩行中の交通事故死者数は、5月から7月にかけて増加傾向がみられる。子どもを交通事故から守るためには、家庭や学校での継続的な教育が必要といえるだろう。